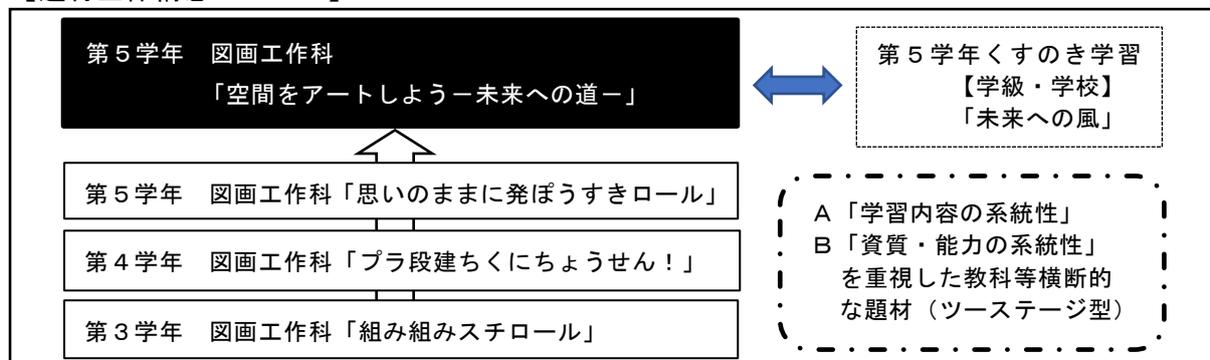


実践事例

第5学年

「空間をアートしようー未来への道ー」図画工作科（+くすのき学習【学級・学校】）

【題材全体構想について】



本題材は、A「学習内容の系統性」及びB「資質・能力の系統性」を重視したツーステージ型（発展性を重視）の題材である。学習内容は、見たり感じたりしたことを基に発想・構想し、表したいことを絵や立体に表すことであり、資質・能力は、形の感じを捉え、自分のイメージや表し方を工夫して創造的に表すことである。

本学級の子どもは、造形活動に対する意欲や関心が高く、伸び伸びと自分の思いを形や色などで表現することができる。また、互いの表し方に関心を持ち、作品について思ったことを自由に伝え合う中で、つくり、つくりかえて自分のイメージした世界を表現していこうとする姿が見られる。しかし、イメージを形にしていく過程において、技能面に困難さを感じて、想像したことを形にしていくことを躊躇してしまう子どももいる。前題材「思いのままに発ぼうすきロール」では、3年生の「組み組みスチロール」や4年生の「プラ段建ちくにちょうせん！」で学んだ経験を活用しながら、自分の感性や想像力を働かせ、イメージを紡ぎながら自分の世界をつくりだしていく活動を行った。発泡スチロールは、熱線カッターで自由自在に形づくることのできるため、技能面に困難さを感じている子どもも、イメージを形にしようと生き生きと活動に取り組み、素材によって表現方法や接着方法が異なることなどを体験的に学んでいた。また、平面的なスチロール板を自立させることによってつくりだされる空間の広がりや、形の組み合わせや重なりによって生まれる形の面白さを、感じ取ることができていた。そして、一人一人が持つ経験を生かして、自分なりに工夫する中で、新たな知識を獲得しながら、自分にとって意味や価値のあるものを生み出していく姿が見られた。このような子どもの姿から、今までの題材を通して高められた資質・能力を生かし、発揮することができる本題材を構想した。

本題材は、既習の学習で扱ってきたスチロールを主材料に用いて、もうすぐ卒業していく6年生に対して一人一人が感じている思いを、形や色を工夫して空間に表現していく活動である。その際、スチロール版画という新たな方法を取り入れることで、スチロールに対して新たな知識を獲得し、これまでに培った経験も生かして、描画材の特性を考えながら、試行錯誤していく。この活動を通して「そうぞうする力」を発揮し、つくりだす喜びを感じられるようにしたい。

【題材（図画工作科）のねらい】

- 描画材の特性や経験を生かして、材料や用具を活用し、6年生へ思いを伝えることができるように、形や色、表し方などを工夫して、つくったり表したりする。
- 身近な場所にあるものや自分たちのつくりだしたものの造形的なよさや美しさ、表し方などについて感じ取ったり考えたりして、自分の見方や考え方を深める。
- 主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、よりよい表現を目指して試行錯誤しながら取り組む。

【題材の展開】（図画工作科 11 時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出会い	<p>6年生に思いが伝わる空間について考えよう。</p> <p>○ 6年生や自分たちについて向き合ったり、材料とかかわったりしながら、思い描くイメージを話し合い、主題を設定する。</p>	<p>● 対象を造形的な視点で捉え、感じたことや考えたことを基に話し合い、経験を生かして考え、主題を設定しようとしている。</p>	3
追究	<p>思いが伝わる空間をつくりだそう。</p> <p>○ 経験を生かして、スチロールの可能性を模索する。表したいイメージや考えについて話し合いながら、形や色、表し方などを工夫して表す。</p> <p style="text-align: center;">↓ ↑</p> <p>○ 他者の表現方法に込めた思いや工夫点を感じ取り、自分たちの表現に生かしたり、他のグループとつなげて見え方を確かめたりしながら、発展的に表す。</p>	<p>● 環境や材料に主体的に働き掛けながら、思い描くイメージをどのように表すか話し合い、自分の見方や考え方を深めている。</p> <p>● これまで培ってきた経験や技能を生かし、表現に適した方法を組み合わせながら、形や色、表し方などを工夫して表している。</p>	7
振り返り	<p>空間をアートして、未来への道をつくろう。</p> <p>○ 作品を展示し、作品を含む周辺環境の変化の様子や、表現に込めた思い、表し方の工夫などを感じ取ったり、考えたりする。</p> <p>○ 6年生と感想交流をする。</p>	<p>● 自他の表現のよさや工夫点などを見付けたり、空間の変化を造形的な視点で感じ取ったりしている。</p>	1

【題材の実際】

（第1～3時）「出会い」

「出会い」の場面では、「今まで図画工作科で学んできたことを生かして、6年生に伝えたい思いを表現できないかな？」という問い掛けをした。子どもは、低学年の頃まで記憶をたどり、今までに経験したことを生き生きと発表した。そこで、子どもから出た意見を「材料」「描画材」「道具」に分けて板書し、視覚的に捉えることができるようにした。すると、今までの学習材を振り返り、「自分たちにしかできない独自の表現がしたい！」という意見が出てきた。そこで、「今まで学んだことが生かして、みんなにしかできないことは何かな？」と聞くと、「スチロールは熱線カッターを使えば、自由に形をつくることができましたよ！」「切り抜いたものを吊るしたらいいのでは……」といった意見が出てきた。その意見を基に、主材料をスチロールに決めた。そして、スチロールを用いて何を表現するか話し合うと、6年生が中学生になったときに、次の段階へはばたくイメージがあるから、天井に鳥を飛ばしてみたいという考えを持つ子どもが多かった。また、個での活動で終わるのではなく、みんなで協力して、6年生へ思いを込めて大きな作品をつくりたいという考えの子どもも見られた。そこで、「未来へはばたく鳥」をテーマにして、6年生に感謝が伝わるような作品を共同でつくっていくことにした。過去の経験を基に学習材とつなげる出会いにしたことで、自分の思いや考えを生み出し、活動への見通しを持つことができていた。

（第4～10時）「追究」

「追究」の場面では、まず、昨年や前単元の作業風景や作品のスライドを見て、スチロールを使った学習を振り返った。「これ、楽しかった！」など嬉しそうにつぶやきながら、過去の活動を思い出して友達に話しかける姿が見られた。次に、動画でスチロール版画を紹介した。子どもは、いろいろな材料を使った版を刷って、紙に模様が写し取られる様子を見ると、「きれい！」「簡単！」と歓声をあげ、作業自体は容易であるが、いろいろな工夫ができることを感じ取っていた。そして、様々な形のスチロールを机に広げると、嬉しそうに気に入った形のスチロールを選び、自由に布やプラスチック、紙などの素材にインクを使って版を押していった。スチロール版をスタンプのようにして押すと自分のイメージを自由に表現できることに気付いていた。最初は、ただ版を押すだけだったが、活動するうちに、「版の向きを変えたらどうなるかな？」

「版にいろいろな材料で模様をつけてみようかな？」など、いろいろな方法を試みて、様々な発見をする姿が見られるようになった。その発見を友達と共有することで、更に考えが広がり、いろいろな表し方をするようになり、手にインクが付いてもお構いなしに生き生きと夢中で活動していた（写真1）。

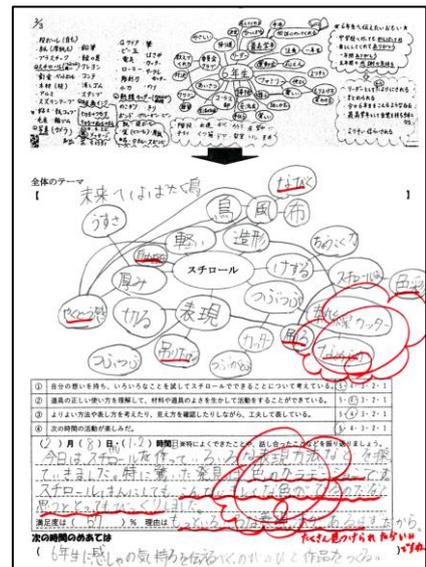


写真1 スチロール版画を試している様子

スチロール版画の面白さを体感した子どもは、自分の思いを形にするために、今までの経験で用いた熱線カッターを使って表現し始めた。前時までの取り組みを生かし、工夫してスチロールを形づくる姿がたくさん見られた。そして、教師が、友達の色紙の面白さを紹介する機会を多く設けると、「きれいだけれど、どうやって押したのだろう？」という疑問を持つ子どもが出てきた。そこで、教師が友達との対話をコーディネートすると、対話を通して「同じ版でも向きを変えたら見え方が変わるよ！」「回転して花や鳥の羽などの形を表したいな。」「熱線カッターで細かい模様をつけてみよう。」「リズムが生まれるように押す場所を変えてみようかな。」「色の付け方に変化を付けてグラデーションにしてみようよ！」など、自分の見方や考え方を深め、表し方を工夫することができるようになっていった（写真2）。活動が進むにつれて、「熱線カッターでたくさん線を入れてみると花の中心の部分に見えてきたよ。」など、工夫して表した版をどの部分に使うとよいかを考える子どもが出てきた。振り返りカードには、「友達と話すといろいろな考えができました。」「スチロール博士になりました。布に刷ると、思っていたよりきれいになりました。布に刷ったものをろうかの天井につけるときれいになりそうだなと思いました。」など、友達と対話する中で、学習材や自分自身とのつながりを深め、活動に対する意欲が高まる様子が見られた（資料1）。



写真2 形が工夫された
スチロール



資料1 振り返りカード

「出会い」の場面で抱いていた「みんなで協力して、6年生へ思いを込めて大きな作品をつくりたい」という気持ちを形にするため、教室の壁に掲示する紙と天井に吊るす薄い布に、たくさんの工夫が施されたスチロール版を用いて刷っていくことにした。大きな紙や布を見て、「私たちのグループは、キラキラしているところに向かっていくから、鳥の大きさは小さくしてはいけないね。」など、今後の活動について自然と話し合う姿が見られ、自分のグループの構図を意識して取り組み始めた。そこで、教師が「遠くから見たらどう見えるかな？」と提案すると、自分のグループの構図だけでなく、全体の構図を考え出し、「どうしたらもっと6年生に思いが伝わるかな？」「天の川を全ての布に描いてみたら統一感がでるのではないかな？」「真ん中の鳥の大きさをもう少し大きくすれば、隣のグループとつながるんじゃないかな？」など、自分たちの思いを伝えるためにはどうすればいいのか、考えを伝え合う姿が見られるようになった。子どもは、作品が出来上がるにつれて、自分自身や他者との対話を通して、イメージを共有し合い、全体の構図にまで意識が広がっていくようになり、更に表現の幅が広がっていった。試行錯誤を重ねて、つくり、つくりかえながら、最後には、6年生への思いが詰まったすてきな

未来への道が完成した。

活動の際に振り返りカードを活用することで、子どもが自分の変容を客観的に認知することができるようにした。それにより、教師も授業中の子どもを観察するだけでは気付けなかった一人一人の活動への思いや態度を知ることができ、新たな視点の提案をしたり、評価に生かしたりすることができた。

（第11時）「振り返り」

「振り返り」の場面では、完成した作品を6年生の教室や廊下に掲示した。普段何気なく過ごしている校舎の廊下や教室を改めて違う視点で見詰めさせ、どこをどのように変化させると自分たちの思いが伝わる空間になるのか、思いを巡らせながら表現した。薄い布は、天井に吊るしたことで、子どもが想像したように風や光との一体感が生まれていた。すると、子どもは、作品を見上げながら手を伸ばし、作品によって空間が変化している様子を満足そうに見ていた。また、5年生だけの相互鑑賞にとどまらず、「6年生を送る会」の花道として、6年生に未来への道を通る機会を設けた（写真4）。「きれいで



写真4 未来への道を通る6年生の様子

感動するね！」「とても嬉しいね！」など、6年生が作品を見ながら笑顔で話す姿が見られた。作品の持つ世界感を感じ取り、鳥のはばたく様子を見ながら自分も鳥になったように作品に向かって嬉しそうにジャンプしている子どももいた。6年生が幸せそうに未来への道を通る姿を見たり、6年生からお礼の言葉を言われたりすると、5年生はとても嬉しそうであった。振り返りカードには、自分たちの思いが形になった達成感や思いが伝わった喜びを感じていることを書いている子どもが多く見られた。子どもは、経験を生かして、他者との対話や協働の活動をする中で、自分の成長を感じるとともに自分の行為の意味や価値に気付き、身の周りの形や色、材料などへの関心が高まっていた。そして、学んだことをこれからも発揮していきたいという思いも持っていた。

【題材の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- スチロールを扱った既習の学習と関連付けるツーステージ型にしたことで、学習に対する意欲が高まり、今までの経験を生かして活動することにつながった。
- 他者との対話や協働の活動が誘発される状況設定や環境設定をしたことは、子どもが自分自身とつながりを深めながら、色や形の表し方を工夫することにつながっていた。
- 見慣れた空間を、視点を変えて変化させ、その空間を相互鑑賞したことにより、造形的なよさや美しさ、表し方などについて感じ取ったり考えたりして、自分の見方や考え方を深めることができていた。
- 「振り返り」の場面で、6年生が作品を鑑賞する時間を設けたことで、子どもが培ってきた力を日常生活の中で「生かし、発揮する」ことにつながり、達成感や満足感を得ることができていた。
- スチロールを用いることで、経験を生かして版面やモビールなど多様な表現をすることができたが、スチロール以外の材料でも可能である表現も見られた。子どもの実態から材料の使い方を再度検討していく必要がある。
- ☆ 子どもが学びをつなぎながら「そうぞうする力」を発揮するための機会を保障したり、場の設定を工夫したりする。そうすることで、題材を通して身に付けた力を、生活の中で「生かし、発揮していこう」とする子どもの姿を目指す。

（森口 朝子）